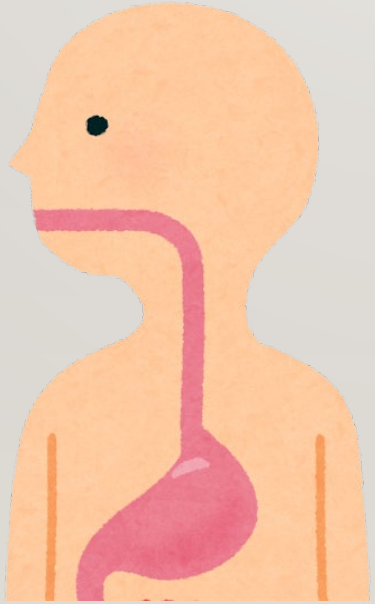
鍼灸治療のいろは

～経・腑・臓の治療の違い～

鍼道五経会 代表　　足立繁久

Ｑ１，鍼灸と漢方の違いってナンだろう？

- 鍼灸治療では〇〇を用い、
  漢方治療では〇〇を用いる。



Ｑ２，鍼灸と漢方の共通点ってナンだろう？

- 鍼灸も漢方もどちらも〇〇が重要。

鍼灸治療における生理学

“経絡を介して治療する機序”を再認識

鍼灸治療の魅力

- 鍼灸治療は楽しい？ or 難しい？

それとも…よく分からない？

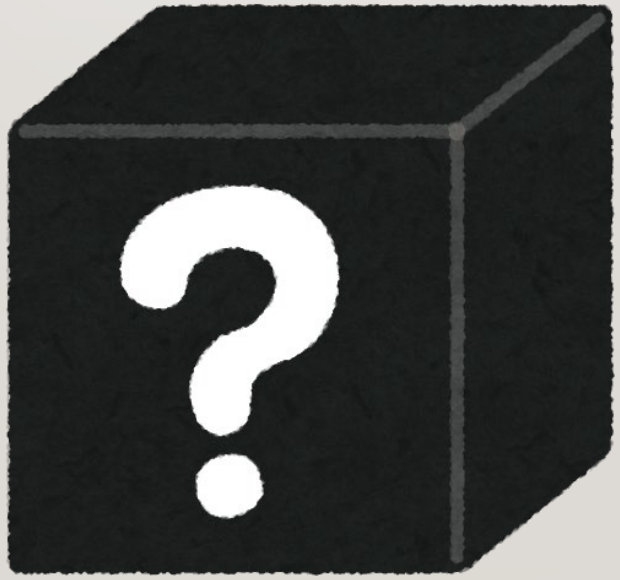
鍼灸は魅力の多い治法である。

その反面“よく分からない”という要素も多い。

その理由を考えてみよう。

鍼灸治療のブラックボックス

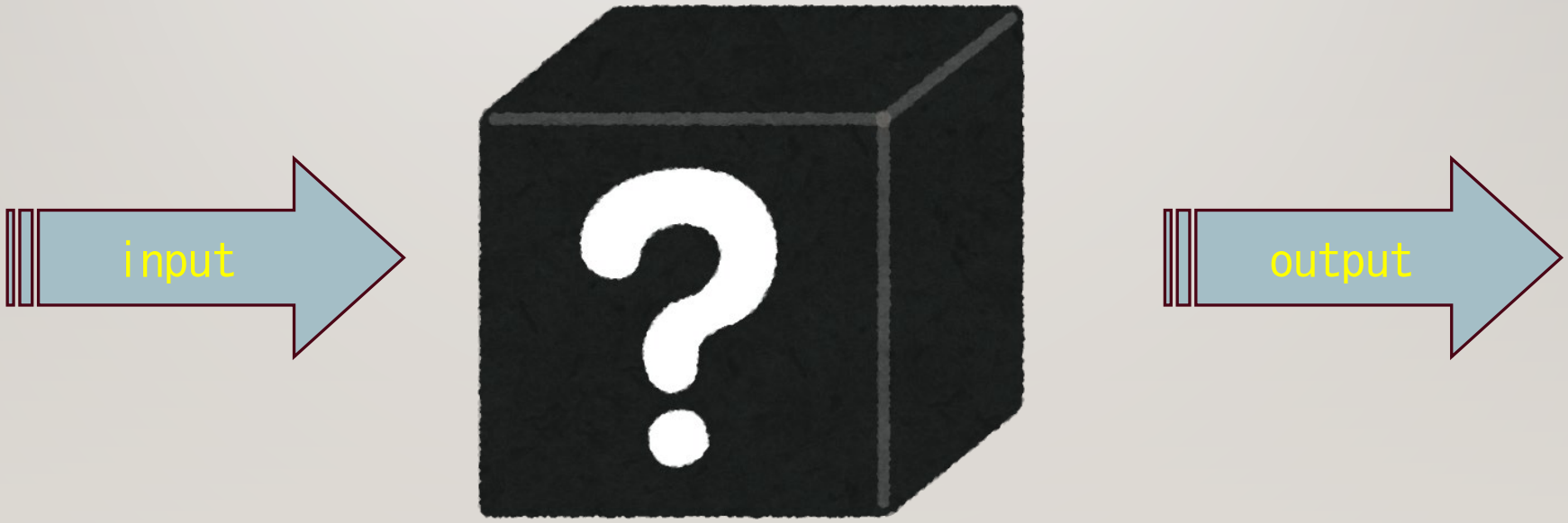
- 鍼灸治療には“よく分からない要素”が多すぎる



不明要素を“ブラックボックス化して治療”を進めている件について

鍼灸治療のブラックボックス

- 臨床現場で日々おこなわれるブラックボックス・テスト

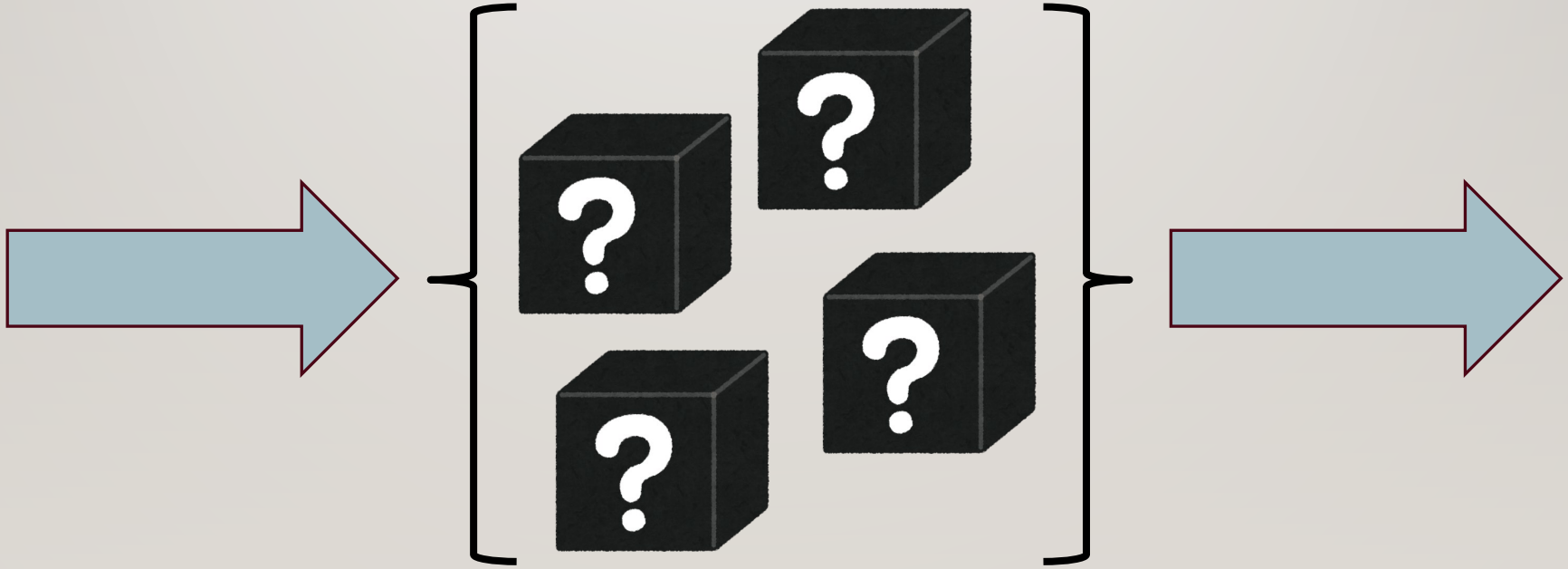


内部構造はさておき、システムを動かす

しかし、そもそもシステムがその都度変わっていることが問題では？

鍼灸治療のブラックボックス

- ブラックボックスが複数あるケースも。



どのシステムを使っているのか不明のまま…

どのシステムが機能したのか？検証できない

肝鬱氣滞を例に考えてみよう

- 肝鬱気滞（肝氣鬱結）とは

肝鬱氣滞イメージ

肝鬱気滞によって起こる症状を挙げてみましょう

肝鬱氣滞を例に考えてみよう

- 肝鬱気滞とは？

  肝氣の疏泄機能が失調することで諸症状が誘発される症候。

- 肝鬱気滞（肝氣鬱結）の特徴

  １、精神抑鬱

  ２、易怒

  ３、胸悶

  ４、脇張

  ５、脉弦

肝鬱氣滞を例に考えてみましょう

- 『中医弁証学』を参考に、肝氣鬱結の症状・所見を挙げると…

① 情緒の変化

② 胸脇部の張痛・少腹部の脹痛

③ 月経不調、月経痛、月経中の乳房の脹痛・乳房腫塊

④ 咽喉部の閉塞感（梅核氣）、頚部の腫塊、腹部の腫塊

これらの病症はみな肝氣が鬱結したものであるが…

肝鬱氣滞を例に考えてみましょう

- 『中医弁証学』を参考に、肝氣鬱結の症状・所見を挙げると…

① 臓の問題

② 経脈の問題

③ 肝氣の問題

④ 経脈の問題

ひと口に肝氣鬱結とはいえ、肝の臓か？経か？病位が異なる

鍼灸は臓腑経絡システムに基盤をもつ医術

- 鍼灸は“臓腑経絡システム”に依存する医術と言っても過言ではない

経絡の病は臓腑に影響し、臓腑の病は経絡に影響する。

生理学

治療理論

経絡を治療することで臓腑は調う。
臓腑を治療することで経絡は調う。

しかし、長所と短所は表裏一体である

臓腑と経絡の密接な関係が仇（アダ）になる！？

- 鍼灸の弱点は“臓腑経絡システム”にある？？？

経絡を治療することで臓腑は調う。
臓腑を治療することで経絡は調う。

結局のところ…

経絡を治療することで、経絡も臓腑も調ってしまう…

“経絡の病”と“臓腑の病”との境界線が不明瞭となる。

経絡を治療することで、臓腑経ともに調う

- 経絡への鍼灸で“臓”も“腑”も“経絡”も治療できてしまう

その反面

臓・腑・経の鑑別が不要となってしまう傾向に…

さらに…

臓・腑・経を対象ごとに異なる
“治療の違い”が見過ごされる傾向を危惧

鑑別診断が不要になってしまう？

治療の目的を再確認！　～経脈について～

- 経脈の役割を考えると…　「経脈」とは脈氣を流通させる存在

経脈は臓腑に属絡し、人体を循環し、生命を維持する。

経脈に対する治療目的は、経脈の循環を改善させること

➢ 補法によって正氣を補う

➢ 瀉法によって邪実を除く

経脈を行く氣を順調に流通させることが治療目的

治療の目的を再確認！　～腑について～

- 腑の役割りを考えると…　「腑」とは「瀉して藏さず」

腑は水穀を取り込み、氣血津液と化し、糟粕を排出する

腑に対する治療目的は、腑を通じさせること

➢ 補法によって腑の力を益し

➢ 瀉法によって腑内の停滞を除く

水穀から胃氣抽出を助け、腑内を通じさせることが治療目的

治療の目的を再確認！　～臓について～

- 臓の役割りを考えると…　「臓」とは「藏して瀉さず」

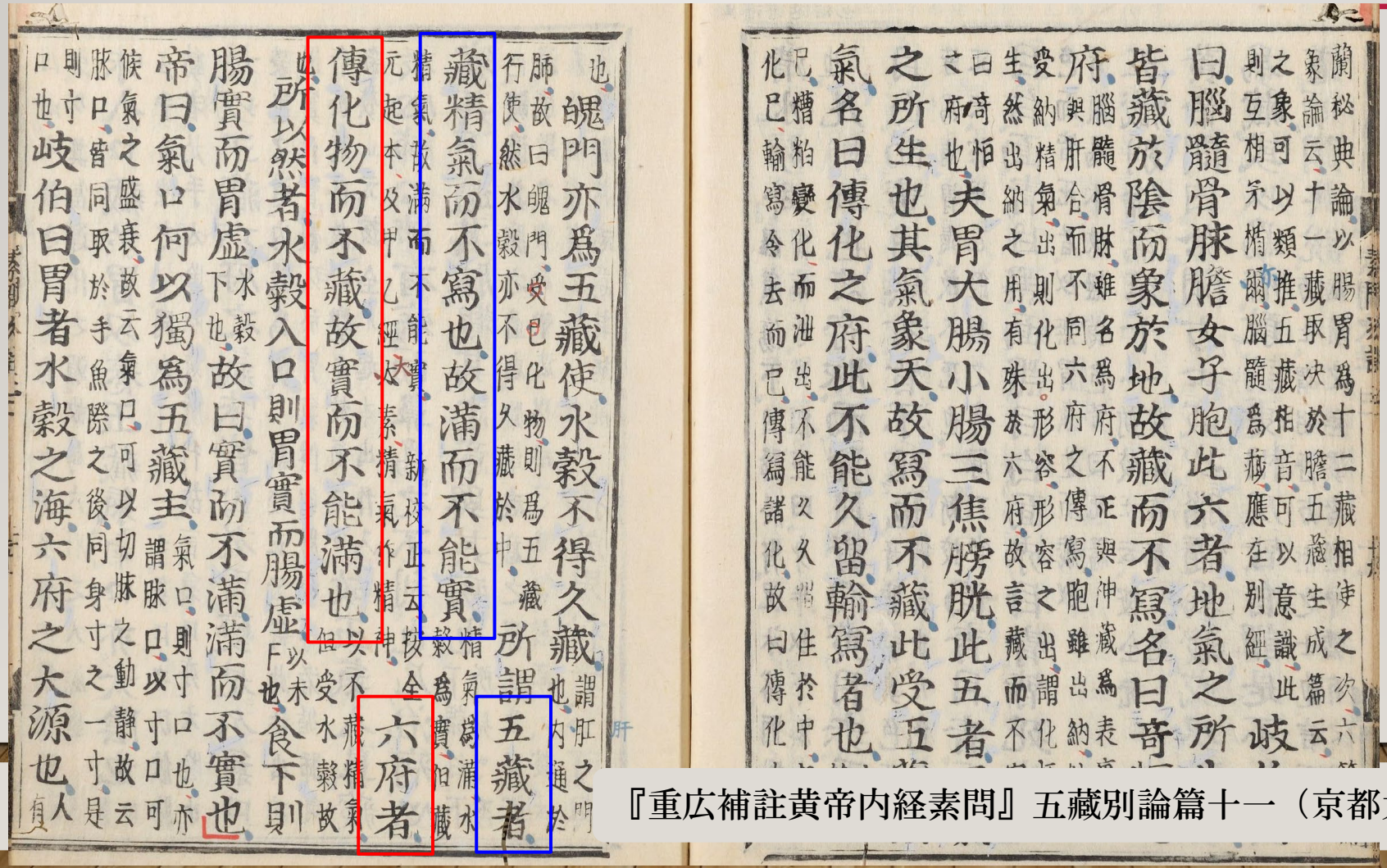
精氣を藏して泄らすことはない。

臓に対する治療目的は、臓氣を守り維持すること

経脈・腑の治療とは目的が大きく異なる

臓氣を助け、精氣を藏する機能を維持させることが治療目的

臓と腑の機能について



『重広補註黄帝内経素問』五藏別論篇十一（京都大学付属図書館より引用）

臓と腑の機能について

- 『素問』に記される臓腑の基本スペック

※1
「五藏者、藏精氣而不寫也。故満而不能實。
六府者、傳化物而不藏、故實而不能満也。」
※2

『素問』五藏別論篇十一より抜粋

五臓とは精気を蔵して瀉さざる也。満ちて実すること能はず。
六腑は物を伝化して蔵さず、実して満ちること能はざる也。

臓と腑では根本的にその役割が異なる

経・腑・臓の治療目的は同じではない

- 経・腑・臓では治療方針が大きく異なる

経脈の病	➢ 経脈を通じさせる
腑の病	➢ 腑を通じさせる
臓の病	➢ 臓を守る

経・腑・臓は機能も階層も異なる。となれば治療もまた異なる

病位を意識するということは診察が変わる！？

- 経・腑・臓を鑑別するために、診察に対する意識が変わる

  - 経
  - 腑
  - 臓

  ⎫ 各病位を診分けるための診法が必要である

☞ となると…臓腑も経絡もみる診法は難解

病位を分析するために情報を集める

臓腑経脈を診る診法

- 脈診にモヤモヤしない？

左脈	臓腑配当		右脈
寸口	心・膻中	肺・胸中	寸口
関上	肝・胆	脾・胃	関上
尺中	腎（小腹）	腎（小腹）	尺中

『新版 東洋医学概論』（医道の日本社）を参考

臓腑経脈を診る診法

- 脈診にモヤモヤしてしまわない？

左脈		経脈配当			右脈
寸口	浮	小腸経	大腸経	浮	寸口
	沈	心経	肺経	沈	
関上	浮	胆経	胃経	浮	関上
	沈	肝経	脾経	沈	
尺中	浮	膀胱経	三焦経	浮	尺中
	沈	腎経	心包経	沈	

『新版 東洋医学概論』（医道の日本社）を参考

ハッキリさせたい脈診

- 脈で診ているのは…臓腑？経脈？どっちなの？
- そして、臓腑の病、経脈の病をどうやって診分けるのか？

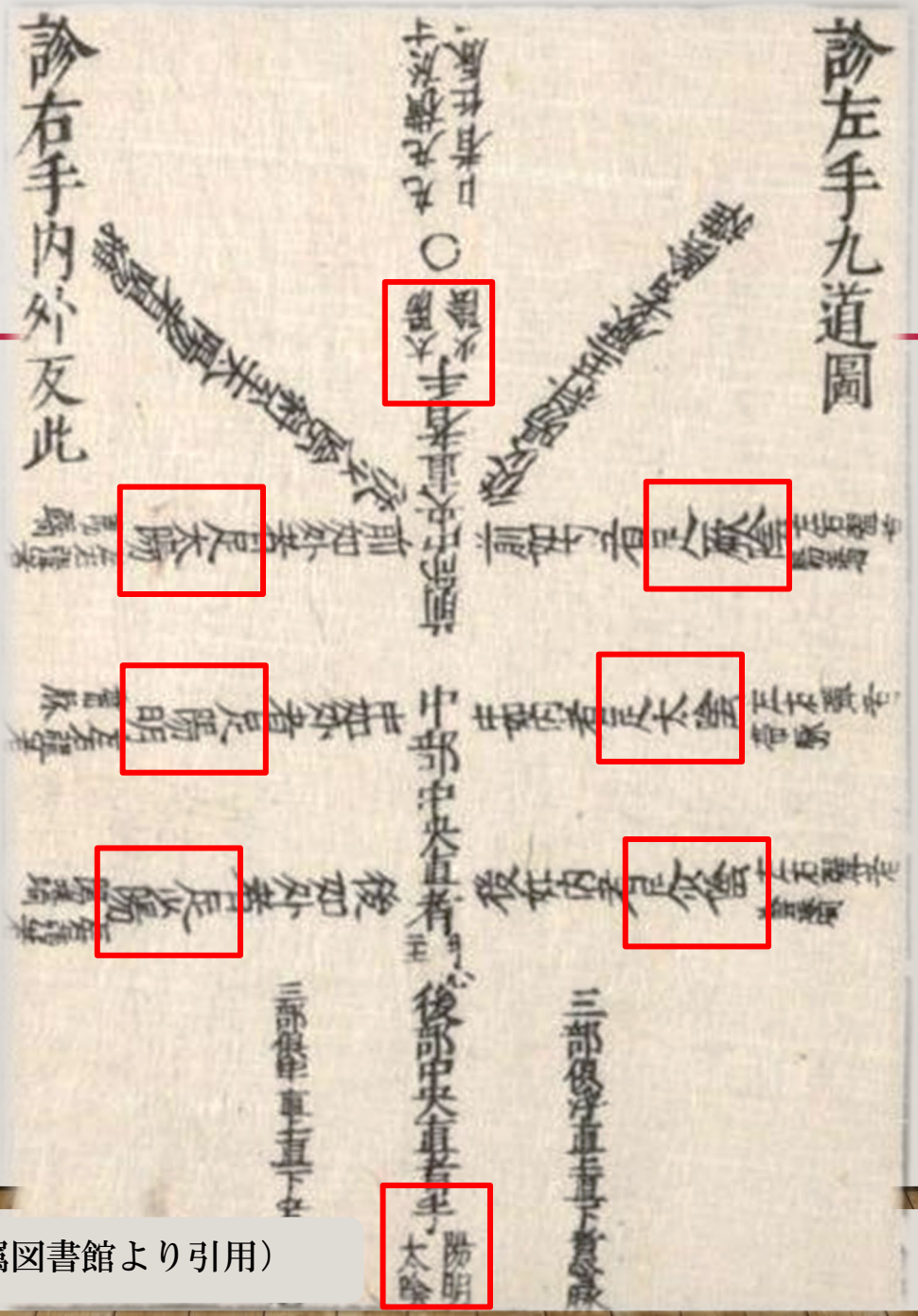
そもそも、臓腑 or 経脈の病を診分ける必要を感じている？

経脈を診る診法

- 気口九道脈診

  経脈の病を診る脈診

  正経と奇経が脈に
  配当されている

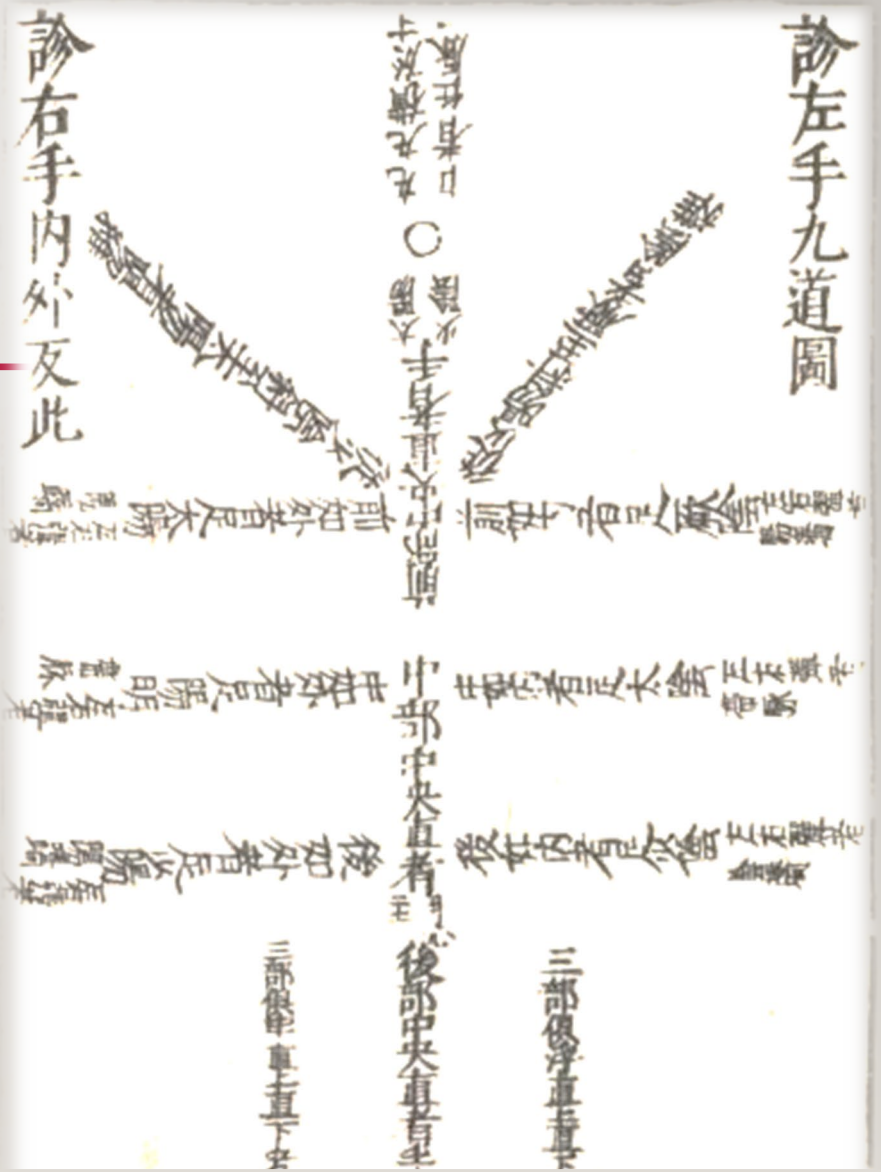


『奇経八脈攷』収録の氣口九道脈診図（京都大学付属図書館より引用）

氣口九道脈診の特徴

- 経脈を診る脈法
  - ➢ 十二正経を診る脈診配当
  - ➢ 奇経八脈を診る脈診配当
- 左脈は左半身、右脈は右半身
- 脈を寸関尺・内中外・浮沈に区分
- 脈を立体的に観る

経脈の病を診ることに特化した脈診法



『奇経八脈攷』（京都大学付属図書館より引用）

鍼灸師に最も適した脈診法

氣口九道脈診の配当図

- 経脈を診る脈法

『奇経八脈攷』（京都大学付属図書館より引用）

外	中	内	
足太陽	手 太陽 少陰	足厥陰	寸口
足陽明	手心主	足太陰	関上
足少陽	手 太陰 陽明	足少陰	尺中

左脈における脈診配当図

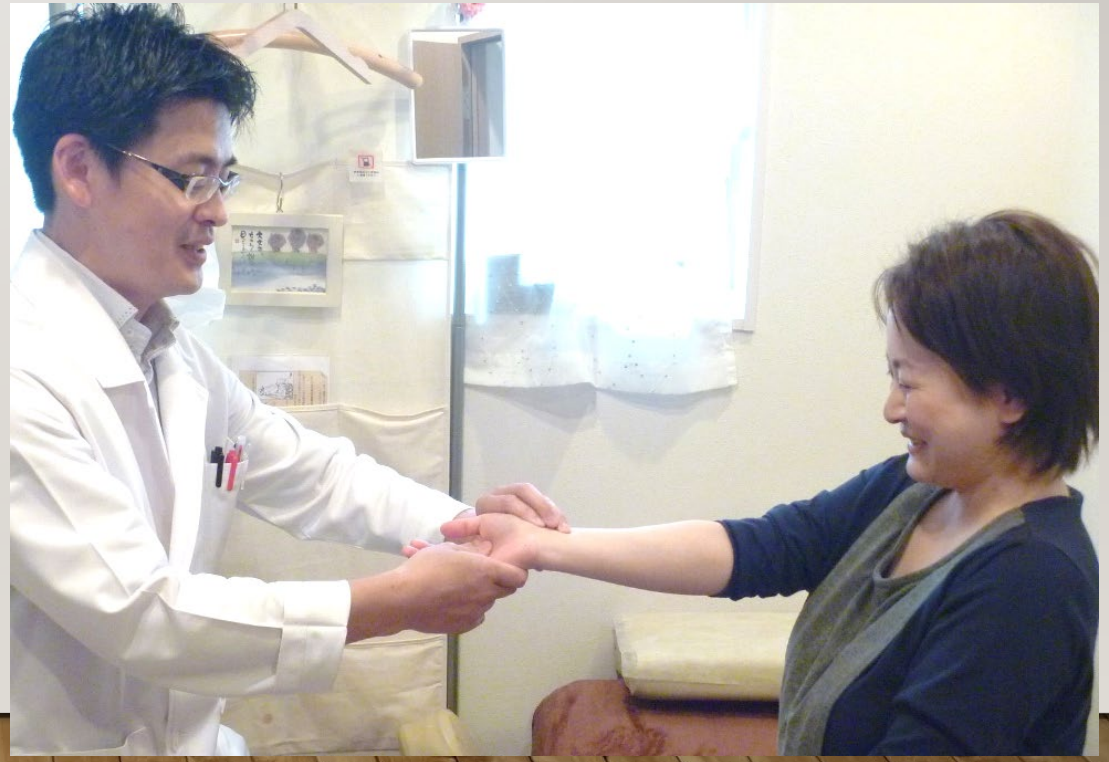
氣口九道脈診の配当図

- 正経配当図
- 左脈の場合

外	中	内	
足太陽膀胱経	手太陽小腸経 手少陰心経	足厥陰肝経	寸口
足陽明胃経	手心主	足太陰脾経	関上
足少陽胆経	手太陰肺経 手陽明大腸経	足少陰腎経	尺中

脈を診るときの注意点

- 基本事項
- 術者は姿勢に注意
- 脈を診る手は互いの中間に位置する
- 首を傾げる・唸る…など
  患者を不安にさせる行為はしない



脈を診るときの注意点

- 脈は片手ずつ診る
- 患家の手首を反らして診る
- 小指は立てない
- 脈の凹凸を診る
- 凸部が該当経脈の実反応

脈の輪郭＝脈形を診る

左手

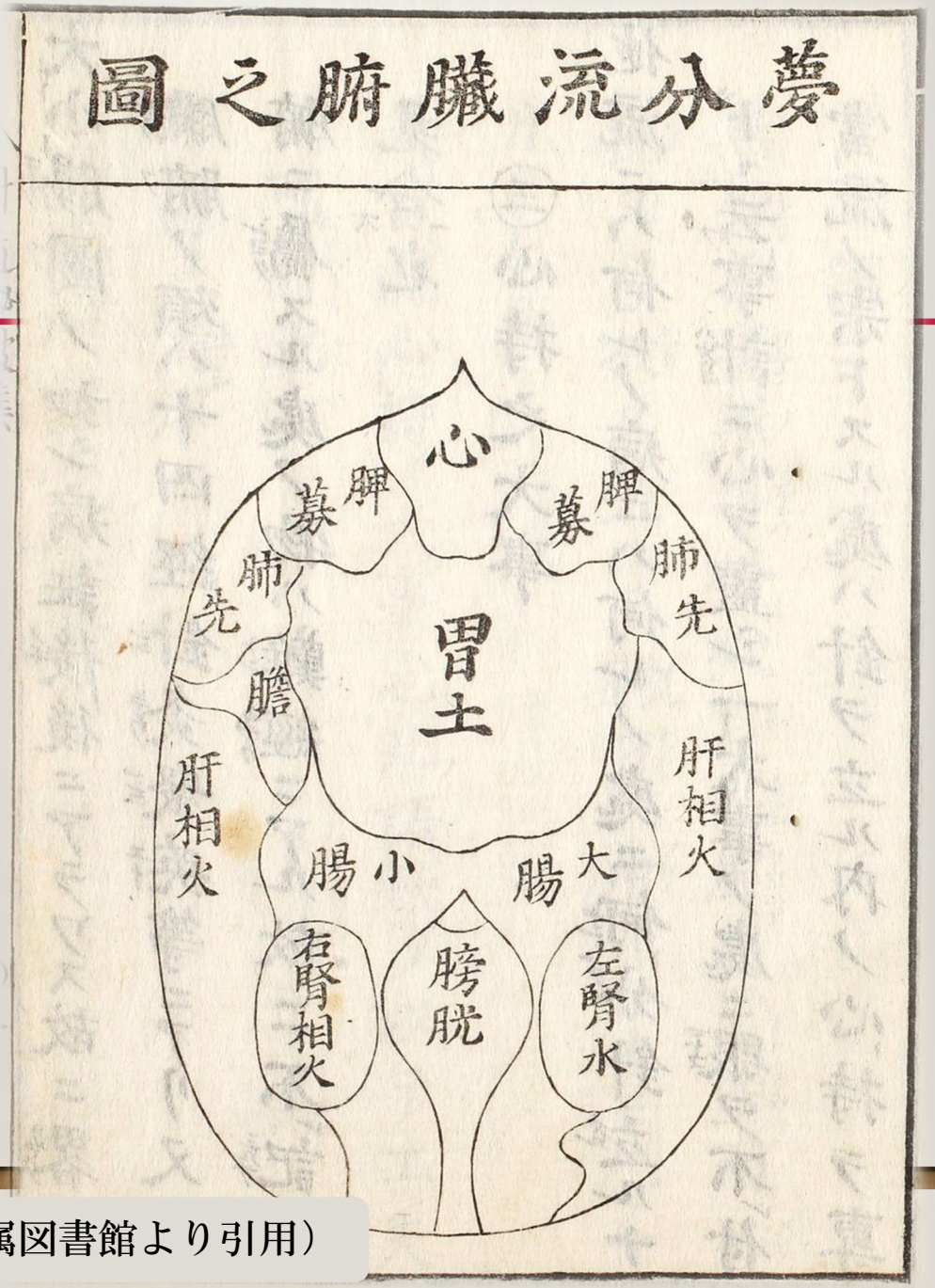
右手

氣口九道脈診の配当図

外	中	内		内	中	外
足太陽膀胱経	手太陽小腸経 手少陰心経	足厥陰肝経	寸口	足厥陰肝経	手太陽小腸経 手少陰心経	足太陽膀胱経
足陽明胃経	手心主	足太陰脾経	関上	足太陰脾経	手心主	足陽明胃経
足少陽胆経	手太陰肺経 手陽明大腸経	足少陰腎経	尺中	足少陰腎経	手太陰肺経 手陽明大腸経	足少陽胆経

臓腑を診る診法

- 夢分流に伝えられる
  臓腑の配当図



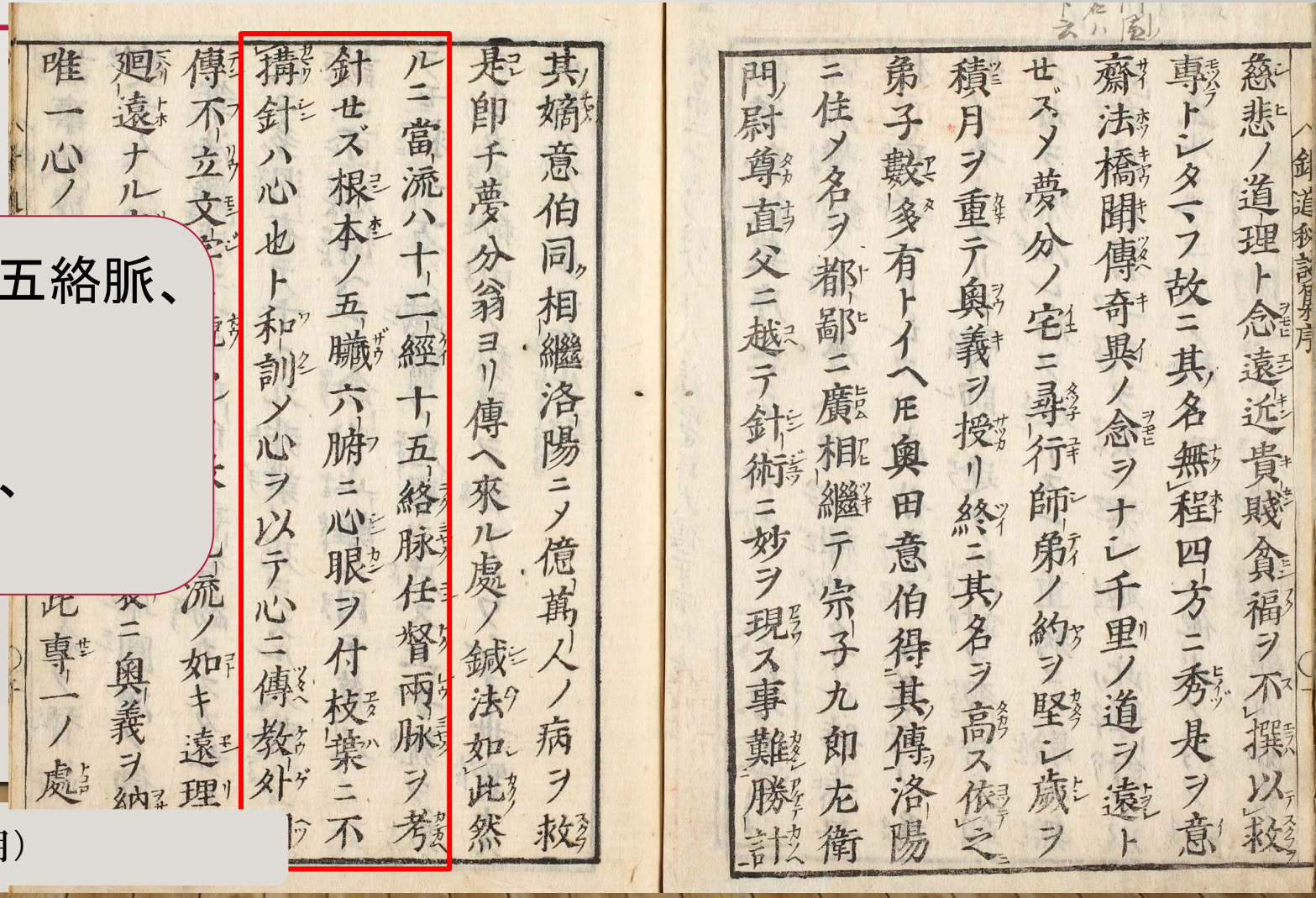
『鍼道秘訣集』夢分流臓腑の図（京都大学付属図書館より引用）

臓腑の病を診る

- 夢分流の流儀

当流（夢分流）は、十二経十五絡脈、
任督両脈を考え鍼せず。

根本の五臓六腑に心眼をつけ、
枝葉に構わず。



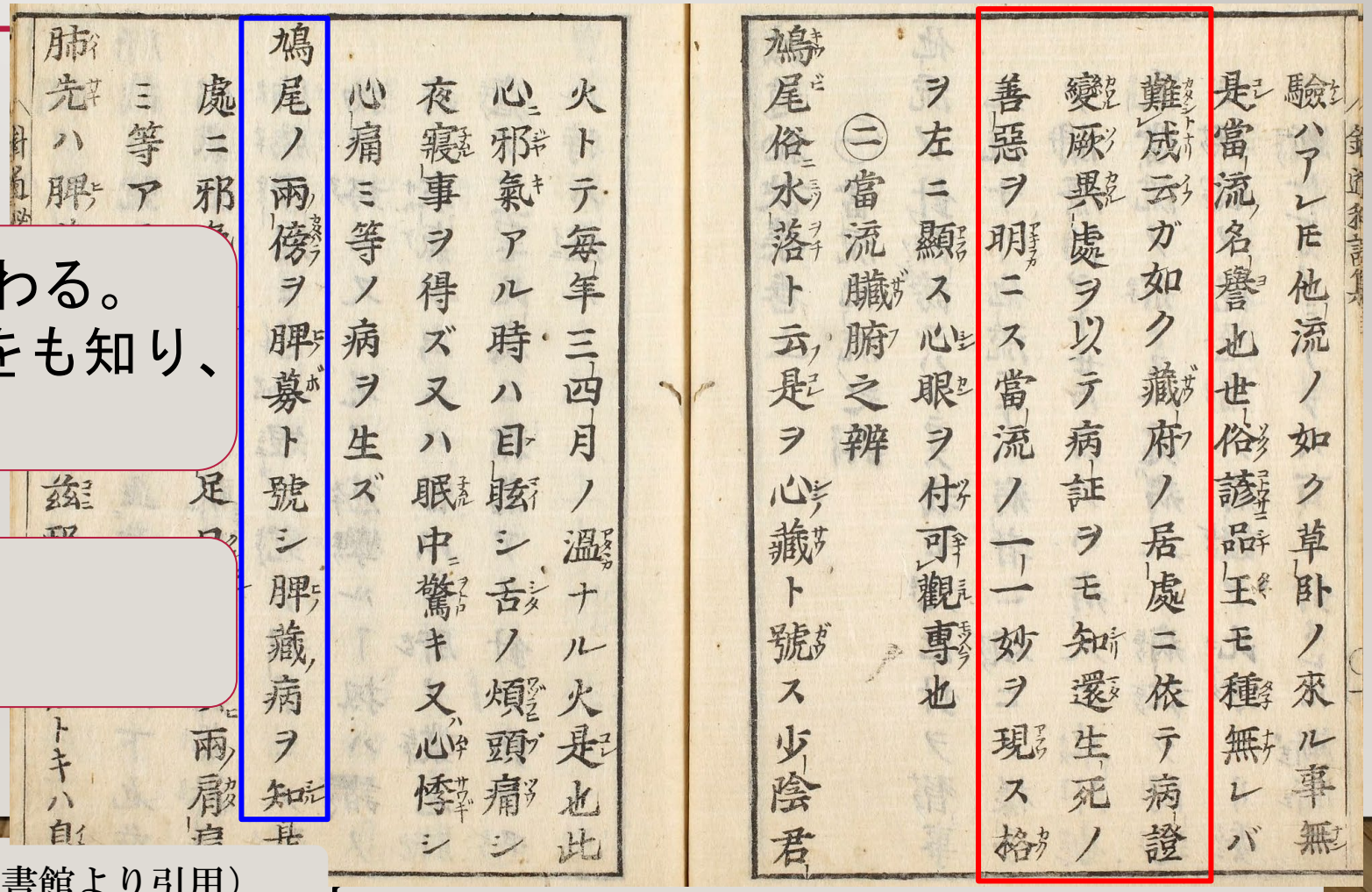
『鍼道秘訣集』序（京都大学付属図書館より引用）

臓腑の病を診る

- 夢分流の流儀

臓腑の居処によりて、病証は変わる。
その異（かわる）処を以て、病証をも知り、
また生死の善悪を明らかにす。

➢ 各配当部位に現れる情報が
それぞれの臓腑の病とする。

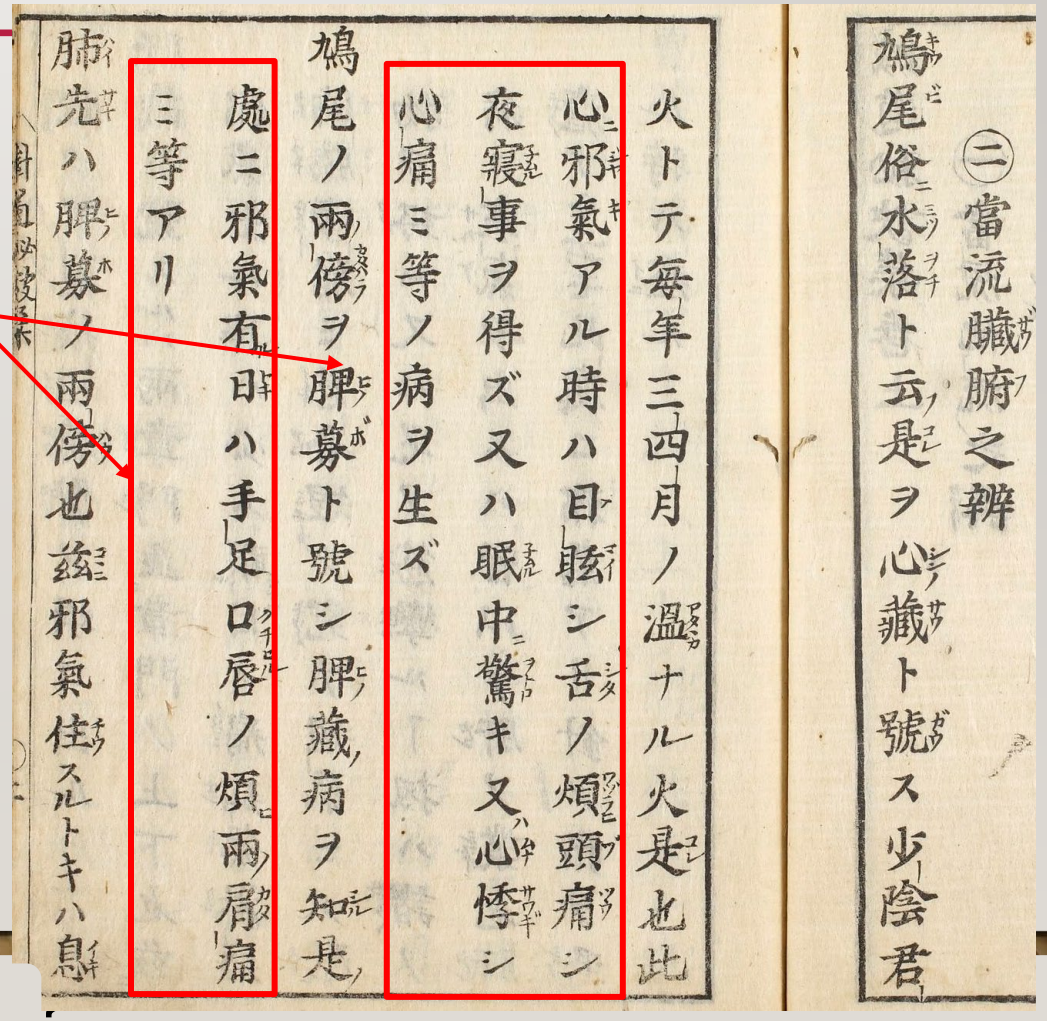


『鍼道秘訣集』當流他流の異（京都大学付属図書館より引用）

臓腑の病を診る

- 夢分流の流儀

臓腑部位に相当する
それぞれの病症例が記されている。



『鍼道秘訣集』當流他流の異（京都大学付属図書館より引用）

腹診のいろは

- 『意仲玄奥』凡そ腹をみること　より

凡そ腹を見ること先ず医者の心を鎮め、雑念を除き去りて、精一に心を用うるに非ずんば能わず。
（患者の気が定まっていないようであれば）暫く時を過ごして、血気が定まり心気が静かなるを待ちて、（患者を）仰臥させ両足を伸ばし、両手を膈に供えて、これ（腹）診るべし。
医者は卒爾に手を下してみだりに腹をもみさすり、撫で探ること勿れ。邪正をかき乱し、火を動かして知れぬもの也。

※『意仲玄奥』（1696年）とは森中虚による書。　※原文より一部、漢字・かな表記を変えています。
「森中虚は意斎流を正統に承け継ぐ家柄に生まれた。」（長野仁氏『意仲玄奥』『陰虚本病』解題より）

腹に触れる際の心配り

腹診のいろは

- 『意仲玄奥』凡そ腹をみること　より

先ず鳩尾より、軽手に撫で下して皮膚の潤燥をみよ。さて臍下・臍中・太極の位をみよ。手を下すこと先ず軽々と自己の手の重さより、病人の呼に随て漸々に手を重く按じ。指をたてて丁寧に各部に於いて浮中沈にして候い、痞塊の有無、邪正の偏勝をさぐり得べし。

鳩尾より両の脇肋、中行、臍下、のこる処なり見るべし。

※原文より一部、漢字・かな表記を変えています。

鳩尾→脇肋→中行→臍下の手順

腹診のいろは

- 『意仲玄奥』凡そ腹をみること　より

無病・実証なる人の腹は皮膚あつくして、総体満ち張りて、
これを按じて、手にあたりさわる物なり。しかも按力あり。
鳩尾より、鳩尾の左右すっかりとして、次第に下ぶくら也。
動氣も静かにして力有り。
但し婦人の腹は男子より柔弱なるものなり。
男子の腹の婦女の如くなるは虚とす。

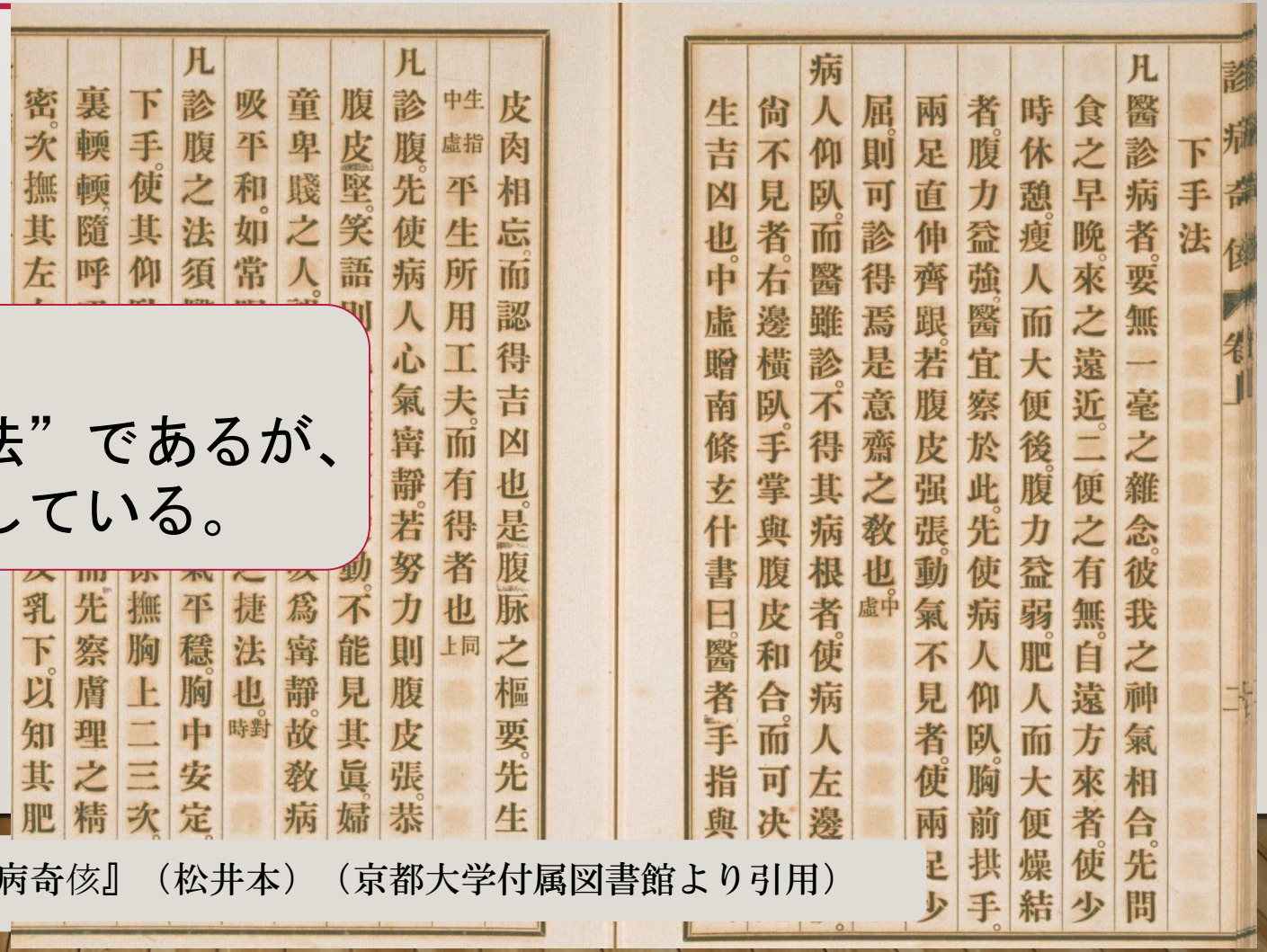
※原文より一部、漢字・かな表記を変えています。

平腹の特徴

日本伝統医学の腹診術

- 『診病奇侯』には
  諸家腹診流儀が記録される

「下手の法」とは
腹を診る際に“手を下す法”であるが、
諸医家が様々な要訣を残している。



※『診病奇侯』（1843年）は多紀元堅による腹診書

『診病奇侯』（松井本）（京都大学付属図書館より引用）

日本伝統医学の腹診術

- 『
諸家流儀が実に豊かに記録
さ

「下手の法、手の重さ、大抵難經の菽法に可準なり…」
（浅井南溟）

「凡診腹之法、須診者與受診者、俱心氣平穏、胸中安定、而後下手。
使其仰臥閉眼如眠、徐々撫胸上二三次、要手裏軟々、隨呼吸行。
無阻其氣而先察膚理之精粗疎密。…」
（竹山陽山）

「三脘脾胃之部。兩脇下肝之候。以至臍下、元氣之所繫、十二經之根本、診之最要者也。」
（無名氏）

「其大意を云へば、二言あり。曰觀相應、曰知定位なり。」
（浅井南溟）

「先左の肋下へ手をさしのべ窺て、心を丹田にこめうかゞひ…」
（白竹子）

『診病奇侯』（松井本）（京都大学付属図書館より引用）

【本日のまとめ】経・腑・臓を診わけることの意義

- 病位を把握・理解すること
- 病位が明らかになれば、治療方針が明確になる
- 病位を意識すれば、自ずと診法も鍼法も変わる。

臓腑と経脈に特化した診法を知ることで治療の幅が広がる

中国の診法と日本の診法を融合させる

- 日本において発展してきた診法技法を活用することで
- より精密な診察・治療を行うことが可能となるのではないだろうか。

流派・流儀の垣根を越えて
技術・医道を研鑽する姿勢が肝要である